



未来は、ミルクの中にある。
雪印メグミルク

2021 年度 酪総研シンポジウム

酪農現場のリスク管理を考えるⅢ ～ 見えない敵から牧場を守る ～

開催日時：2022 年 2 月 3 日（木）13:00～17:00

開催場所：WEB 開催（Zoom ウェビナー）

雪印メグミルク(株) 酪農総合研究所

〒065-0043 札幌市東区苗穂町 6-1-1

TEL : 011-704-2131

FAX : 011-704-2417

HP : <https://www.rakusouken.net>

2021 年度 酪総研シンポジウム 次第

1. 開 会 13 : 00
2. 主催者挨拶 13 : 00～13 : 10
雪印メグミルク株式会社 常務執行役員酪農総合研究所所長 戸邊誠司
3. 講 演
講演 1 13 : 15～14 : 15
「宮崎酪農からのメッセージ～口蹄疫の脅威を伝える～」
宮崎県経済農業協同組合連合会 酪農飼料部部长 大村賢太郎 氏

講演 2 14 : 15～15 : 00
「牧場を守るワクチネーション最前線」
北海道ひがし農業共済組合 根室西部事業センター
診療 2 課診療課長 (獣医学博士) 加藤肇 氏

【休憩 15 : 00～15 : 15】

講演 3 15 : 15～16 : 00
「酪農現場での乳房炎の発生要因とその対策」
雪印種苗株式会社 事業本部 トータルサポート室 岡本武史 氏
4. 総合討議 (質疑応答) 16 : 00～17 : 00
座長 雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所 担当部長 三木保志
雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所 担当部長 越智成東
5. 閉 会 17 : 00

「宮崎酪農からのメッセージ

～口蹄疫の脅威を伝える～

宮崎県経済農業協同組合連合会
酪農飼料部 部長

大村 賢太郎 氏



全国のみな様に、口蹄疫発生後の対応、そして再生・復興へのご支援を頂き、心より感謝しお礼申し上げます。心温まるご支援により、勇気とパワーを頂き、絆の大切さを実感いたしました。今、宮崎の生産者も笑顔いっぱい酪農・畜産に取り組んでいます。そして、地域経済も活発になりました。

平成22年に宮崎県で口蹄疫が発生・終息してから12年が経とうとしています。当時、4か月に及ぶ「見えないウイルスとの戦い」で、297,808頭もの牛さん豚さんの大切な尊い命を犠牲にしました。二度と発生させない強い決意を持ち、「忘れない そして前へ」を合言葉に、生産者や県・市町村行政、JAグループ宮崎及び関係団体等と一丸となり酪農・畜産の再生・復興、新生に取り組んできました。また、「毎月20日は、県内一斉消毒の日」とし地域防疫を推し進めています。

10年ひと昔と言いますが、忘れない、いや、「忘れられない大惨事」です。あの時の状況をお伝えし、牛さんへの思いを再確認し、そして愛おしい家族とし酪農を推し進めていければと、少しでもみな様の参考になればと思い、メッセージを送ります。

「牧場を守るワクチネーション最前線」

北海道ひがし農業共済組合 根室西部事業センター
診療2課 診療課長（獣医学博士）

加藤 肇 氏



経鼻粘膜投与型ワクチン TSV®-3

子牛にカゼをひかせるとその後の死亡率が2.5倍に上昇する。また、初産期に難産する確率が2.4倍に上昇する。さらに、初産乳期の中に、病気で廃用になる率が1.84倍増加する。このように子牛期にカゼをひかせることは、繁殖効率に著しい低下を招き、農場の生産性を著しく低下させる。

しかし近年、酪農場の規模拡大にともない、子牛の集団飼養が増えたこと等、子牛がカゼをひくリスクが大きく増加している。子牛のカゼの原因の最大の病原体は、牛RSウイルスである。牛RSウイルスは間質性肺炎という重篤な肺炎を起こす。抗生物質は効果を示さず、予防することが重要である。従来の注射型の牛RSウイルスワクチンは、予防効果が低く、安全性に問題があった。昨年発売された経鼻粘膜投与型ワクチン TSV®-3 は牛RSウイルス感染症の予防に極めて有効である。今回はこのワクチンの有効な使用方法について説明する。

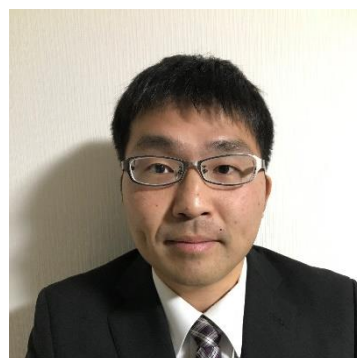
牛サルモネラワクチン

近年、抗生物質の効かないサルモネラ菌（多剤耐性サルモネラ菌）が発生する事例が多数報告されている。多剤耐性サルモネラ菌は幼児や高齢者および基礎疾患のある人に感染すると深刻な病態になり、公衆衛生上大きな問題になっている。多剤耐性菌発現を阻止するためには、サルモネラ症を抗生物質で治療するのではなく、ワクチンを使用して予防することが重要である。2014年に市販された新しいサルモネラワクチン ボビリスSは、安全性に優れたワクチンであり、サルモネラ症予防に有効である。今回はこのサルモネラワクチンの有効な使用方法について説明する。

「酪農現場での乳房炎の発生要因とその対策」

雪印種苗株式会社
事業本部トータルサポート室

岡本 武史 氏



酪農経営にとって乳房炎が発生すると多大な経済的な損失が発生する。直接的な損失としては、「生乳の廃棄」、「治療薬や診療代の発生」があげられる。それ以外では「体細胞数増加によるペナルティ」、「泌乳期間の乳量損失」、「余分な労働」、「淘汰率と更新率の増加」、「乳牛の死亡」がある。その損失額は日本全体で年間 800～1000 億円といわれている。北海道酪農検定検査協会の検定成績では北海道の体細胞数は年々低下している。

しかし乳用牛の疾病事故で最も多いものが乳房炎を代表とする泌乳器疾患であり、診療件数の3割を占めるといわれている。これは乳房炎となる要因が様々あり、それが複雑に絡み合っているからと考えられる。今回はそれぞれの要因（「環境」、「乳牛の免疫」、「搾乳」）に焦点をあて、現場事例とその対策内容を紹介する。

北海道内のA牧場では、分娩後の乳房炎に悩まされていた。そこで乾乳期間の体細胞数の動向を調べてみると、分娩した3頭に1頭は体細胞数が20万個/ml以上で分娩しており、そのうちの72%が乾乳期中に体細胞数が増加していた。また、月当たりの分娩頭数が増えると分娩後に高い体細胞数となる牛が増えていた。そこで「過密防止」・「敷料増加」・「シールド材の使用」を実施した。結果、分娩後に高い体細胞数となる牛は減少した。どのような場合に体細胞数が高くなるか調査し対処する必要がある。

北海道内のBTMRセンターでは自給飼料の品質が低下し、乳房炎などの疾病に悩まされていた。飼料分析を行った自給飼料の20%近くが低品質であり、それが給与される時期は体細胞数20万個/ml以上の牛が増加していた。そこで自給飼料の発酵品質改善のため、「水分調整」・「サイレージ添加剤の適切使用」・「踏圧密度の改善」を行った。結果、Vスコアは改善され、体細胞数は減少した。特に夏場の体細胞数の減少が顕著であった。自給飼料の低品質の原因を突き詰め、それを改善する必要がある。

北海道内のC牧場では、搾乳担当者間で搾乳手技にばらつきがあり、その改善を目的とした搾乳立会を行った。1回目の搾乳立会では泌乳の立ち上がりが悪く、二峰性の泌乳曲線を見せる牛も確認できた。また、ミルカー装着のタイミングは担当者によって大幅に異なっていた。そこで「前搾りを強く5回に統一」・「渋い牛も通常通り搾乳」を行った。2か月後の

2回目の搾乳立会では、ミルカー装着のタイミングが大幅に改善され、泌乳の立ち上がりも良くなった。搾乳時間は減少し、体細胞数は減少傾向となった。搾乳手技の改善により、泌乳生理に沿った搾乳が行え、結果として体細胞数が減少した。泌乳生理に沿った搾乳手技を実施しているかを確認し、問題点を従業員全員で共有し改善する必要がある。

乳房炎の発生要因は様々ありそれぞれ対処方法が異なる。どれが主たる要因となっているのか考え、対策を講じる必要がある。